

『煙一ぼくらの地球』(RØGEN)

イブ・スパング・オルセン、絵本、デンマーク Gyldendal 社、

1970年初版、2009年改訂版発行、40ページ

『つきのぼうや』をはじめとした作品がロング・セラーになっている国際アンデルセン賞画家、イブ・スパング・オルセンが大気汚染をテーマに描いた絵本。デンマークでこのテーマの絵本が出版されたのは、これがはじめてだった。オルセンは、自家用車が普及しはじめた 60 年代に、『ピーターのじてんしゃ』(文化出版局) という絵本の挿絵を描いたり、自然保護団体の活動に参加したりと、社会活動に寄与したことでデンマークの人々の記憶に残っているようだ。「政治的なメッセージを前に押し出しすぎることなく、ユーモアをまじえながら、人間と自然の関係性や生の根源的意味を描いた」と現地で評されている通り、豊かなデンマークの自然が描写された彼の作品からは、自然への深い愛情が感じとれる。

デンマークと同じく日本でも高度経済成長期に、大気汚染が問題視されるようになり、硫黄酸化物を中心とする産業公害型の大気汚染対策は着実な進展をとげた。しかし 1970 年代後半から大都市地域を中心とした都市・生活型の大気汚染が問題となり、十分には改善されていないのが現状だ。また 2012 年 3 月、経済協力開発機構 (OECD) が報告書で、インドや中国などで急激な工業化が進んでいることなどが原因で、2050 年までに大気汚染が原因で早死にする人が全世界で年間 360 万人に達するという見通しを示したところだ。

国際的なとりくみである京都議定書で日本に対し、2012 年末までに 1990 年比でマイナス 6%の二酸化炭素削減義務が設定されたが、達成できるかは不透明だ。一方、デンマークは、1990 年比マイナス 21%の削減を求められていたが、2002 年にはすでに達成している。天然資源が乏しく、原子力発電所をもたないデンマークでは、1970 年に再生可能なエネルギー技術への投資額の 30%を負担する助成金を導入するなど、風力発電やバイオ燃料など、再生可能エネルギーの利用を政府が促進してきた。このように自然への敬意を失うことなく開発を進めてきたデンマークは、世界一豊かで、かつ幸福な国のひとつとして知られている。

2009 年 11 月に放送された BS1、『グリーン・アース』『環境先進国デンマークの実像』で、デンマークの 3 割強の人達が、環境に配慮して、自転車通勤を行っていること、デンマークが風力発電技術の開発に努めたこと、1985 年に原発を永久放棄し、その後二酸化炭素排出量の多い石炭火力発電に反対する市民運動が起こったこと、国民の環境への高い意識と政府の強いリーダーシップにより、温暖化対策が進められたことが語られた。また 2012 年 3 月には、NHK の『地球イチバン』でデンマークと同じく幸せな国として注目が高まっている秘境ブータンの特集がされ、自国の行く末を憂える日本人の心を動かした。ブータン政府は、自然や家族とのつながりを大切にし、国民総生産よりも国民総幸福を重視しているそうだ。

幸福とは何なのか？ 日本は今、そのことを考え、選択すべき岐路に立たされている。

(作者情報) イブ・スパング・オルセン

1921年、コペンハーゲンに生まれる。教職に就きながら、王立美術大学でグラフィック・アートを学ぶ。絵本のほか、TV番組制作、陶器のデザインなどの分野でも活躍。1972年度国際アンデルセン賞画家賞、1976年デンマーク優秀グラフィック・インダストリー賞など数々の賞を受賞。

作絵を手掛けた絵本に『つきのぼうや』、『はしれちいさいきかんしゃ』、『ぬまばばさまのさけづくり』、『トンチンカンばあさん』(福音館書店)、『ネコ横丁』、『キオスクばあさんのひみつ』、『おとなをつかまえよう』、『かぜ』、『あかいボールのぼうけん』(文化出版局)、イラストのみを手掛けた絵本、読み物に『5ひきのトロル』、『小人のすむところ』(ほるぷ出版)、『アンデルセンの童話』1～5巻(福音館書店)、『アンデルセン自伝』(あすなろ書房)などがある。

日本でまだ発売されていない作品に、『クリスマスまで、ニッセからの24の手紙』(読み物、90ページ)、『ティムスゴードのニッセ』(読み物、56ページ)などがある。

デンマークでは、小児癌におかされた子ども達の基金のためにポスターを作るなど、社会活動に寄与したことで知られているオルセン。
<http://www.dn.dk/Default.aspx?ID=2371>では、息子さんとお孫さんと一緒に自然保護団体のPR映像に登場し、最近の子どもが、TVやゲーム、ネットにばかり夢中で、自然の中で過ごす時間が減ってきていることは問題だと話している。人間と自然との関係を抜きにして、親が子どもに、人間とは何かを示すことはできないという。農家の家庭に生まれ、自然の中で育ち、暮らしてきた彼にとって、自然は生活の、そして人生の一部だった。

2011年1月に、90歳の誕生日パーティーが開かれたが、その翌年2012年1月に、オルセンは亡くなった。ご本人がご存命でないのは残念だが、2021年1月11日の生誕100周年記念の際には、デンマークで記念事業が行われるのではないか。

(試訳)

ある朝はやく、犬のスニフが、「ワン」とないた。おとうさんとおかあさんが、ぼくらの部屋にやってきたんだ。

「おはよう。きょうはとってもいいんきよ」とおかあさんがいった。

「ドライブにいこう」とおとうさんもいった。

「いく、いく。スニフも、つれていっていい？」ぼくがたずねると、

「森にいきたいな」とおねえちゃんもいった。

おとうさんはうなずいた。「いいよ。スニフもつれて、森にドライブへいこう。おひさまのしたで、リスやウサギや鳥や花をみよう。きれいな空気をおもいきりすえば、子馬みたいにげんきになるぞ」

子馬みたいになりたいぼくたちは、さっそくでかけることにした。

森がちかづいてくると、おかあさんが声をあげた。

「あら、なんだか空気がよどんでない？ けむたくて、すいこんでも、ちっともきもちよくないのよ。これじゃ、子馬みたいに元気になんて、なれっこないわ」

そういえば、鳥も花もチョウチョウもウサギも鹿も、みんなげんきがない。

「ほんとうね」とおねえちゃんがうなずいた。

「だれかが、猟でもしにきたんじゃない？」とぼくはいった。

スニフはしゃべれないので、こたえるかわりにクーンとないた。

「煙がどこからきているのか、しらべてみよう」

おとうさんはいうと、煙がながれてきているほうへと、車をはしらせた。

やがてぼくらは、工場にたどりついた。

「あのおじさん、この工場のもちぬしかしら？」おねえちゃんがいった。

「その煙、どうにかしてくれませんか？」

おとうさんがいうと、工場のおじさんはぺこりと頭をさげた。

「すみません。わたしだって、煙はいやなんです。さいきん、こどもたちの顔色もわるいし。でも、どうしたらいいか、わからないんですよ」

「ぼくらが、どうにかしてあげる」ぼくは車から、ワインのコルクとサッカーボールをもってきた。「煙がでてこないように、これでえんとつを、ふさいだらいいよ」

でもおじさんは首をふった。「そんなことしたら、工場のなかが、煙だらけになっちゃうじゃないか。顔も、まっくろになっちゃうよ」

すると、おかあさんがいった。「このコーヒーマーカーをつかってください。なかのフィルターが、すすをとりのぞいてくれるはずよ。むぎわらぼうしもあげます」

「わたしのスキーぼうと、ふきんもつけてください」とおとうさん。

「くつしたもどうぞ。もう小さくてはけないから」とおねえちゃんもいった。

犬のスニフも煙がきれいみたいだ。でもなにもあげられるものがないから、じぶんの毛をむしりはじめた。

「これは、これは、どうもありがとう」おじさんはいうと、さっそくえんとつをふさいだ。

「どうもありがとう！」おじさんは大よろこび。ぼくらを、えがおでみおくってくれた。

「さようなら」とおかあさんもあいさつした。でも、だれにむかっていっているのか、ぼくにはわからなかった。おじさんと子どもたちにはかな？ それとも、コーヒーメーカー？

「さあ、これでよし」とおとうさんはいうと、また車をはしらせた。

「森でおひるをたべましょう」とお母さん。

「これで鳥さんたちも、げんきになるわ。さっきの子たちの顔色も、きっとすぐによくなるわよね」とおねえちゃん。

でも、おかしいぞ、また煙のにおいがする。

空をみあげると、もくもくと煙がただよっているじゃないか！

大きな工場のえんとつから、でてきているみたいだ。

「その煙、どうにかしてくれませんか？」おかあさんがいうと、「すみません」と声がした。工場のまえに、おじさんがたっている。この工場のもちぬしだろう。

「ちりをとりのぞく機械をかわなくちゃいけないんですけど、お金がなくて」

するとおねえちゃんが、ちょきんばこをさしだした。

「かわいそう。このなかに、お金ははいっているから、つかっていいわよ」

ぼくもてのひらいっぱい、おかねをひろげた。

「まちにあそびに行くために、ためていたんだけど、これもあげるよ」

「わたしの、のど飴代もどうぞ。くうきがきれいになったら、かわなくてすむから」とおかあさん。

「たばこをかおうとおもっていたんだけど、もうすわないから、どうぞ」とおとうさん。

スニフも煙はいやみたいで、大こうぶつの骨をさしだした。

「これは、これは、どうもありがとう」とおじさんはいうと、さっそく機械のとりつけをはじめた。

うれしくなって、ぼくはさげんだ。「やった！ これで空気がきれいになるね」

えんとつは、すっかり、りっぱになった。煙はでてはいるけど、まえみたいに、黒くはない。

「どうもありがとう」おじさんたちは、ぼくらをみおくってくれた。

「よかったね」とおとうさん。

「さあ、森でおひるをたべましょう」とおかあさん。

でも、おかしいぞ、また煙のにおいがする。

小さなかわいい家の、小さなすてきな庭に、黒い煙がもくもくとただよっている。

庭で花をつんでいた小さなおばあさんに、おとうさんがいった。

「その煙、どうにかしてくれませんか？ のどがいたくなるし、服も黒くなっちゃいますよ」
するとおばあさんは首をかしげた。「おかしいねえ。タバコなんか、すわないのに」

「でもえんとつから、煙がでてますよ」とおかあさん。

「おやまあ、ほんとうだ。ばらの手いれにむちゅうで、ちっともきがつかなかったよ。オーブンのケーキがこげちゃったのかねえ」

「いや、きっと、だんろに、すすがたまっているんじゃないかな。これじゃ、せっかくのばらのかおりが、だいなしですよ」

おとうさんがいうと、おばあさんは、ぼくらを家にまねきいれてくれた。

「どうぞ、なかにおはいりください。わたしはヨクムセン。おきやくさんなんて、なん年ぶりだろう」

地下室には、ぼくらがみたことのない、むかしのものがいっぱいだ。だんろも、あった。

「ちょっと、なかをみせてください」おとうさんはいうと、だんろをあけた。すると……

「ゴホッ、ゴホッ！」顔じゅうすすだらけだ！

おとうさんはもういちど、なかをのぞくと、

「おや、これはなんだ？」といいだした。

「それは、わたしのブラシですよ。十八年まえにそうじしたときから、いれっぱなしだったみたいだね。みつけてくれて、ありがとう」ヨクムセンさんはうれしそうだ。

「これは、さすがにもうつかえないんじゃないですか。でもだんろは、そうじすれば、みちがえるようにきれいになりますよ。それに、わたしの顔もね」とおとうさんはわらった。

かえりにヨクムセンさんは、てづくりのペパーミント・キャンディとケーキをくれた。

「どうもありがとう。バラのいいかおりがしてきたよ。きをつけて！」

「おとうさん、すごいわね」とおかあさんがいったけど、おとうさんは、

「さあ、こんどこそお昼をたべよう」とたべものことばかりかんがえている。

「地下室にあったブーツ、すてきだったなあ」とおねえちゃんは、なごりおしそうだ。

犬のスニフはだまっていたけど、ぼくはだまっていられなかった。

「おかしいぞ。また煙のにおいがする」

でもおとうさんはおかまいなしで、車をはしらせた。「空気がきれいだと、きもちがいいなあ」おねえちゃんが、窓から顔をだして、いった。「あら、馬がせきこんでるわ」おかあさんも、いった。「あのうさぎ、鼻と口をふさいでるわね」
「車から、煙がでてるからさ」とぼくはさげんだ。
「こまったなあ……。そうだ！」おとうさんはいうと、森のかわりに、工場へむかった。

工場につくと、作業員さんたちが、車のねじをあちこちはずしはじめた。
「おねがだから、しめわすれないで」ぼくは、つぶやいた。
「いくらぐらいするのかしら」おかあさんは、しんぱいそうだ。でも、おとうさんは、
「もうじきお昼ごはんがたべれるぞ」と、まだごはんのことをいっている。
スニフはだまって、舌でじぶんの口のまわりをなめていた。

さぎょうがおわると、車から黒い煙はほとんどでなくなった。
「さあ、森にいきましょう」とおかあさん。
森につくと、おねえちゃんがいった。「さっきより、植物があおあおしてるわ」
おとうさんもうれしそうだ。「ようやくごはんがたべれるぞ」
「ちっとも煙くさくないね」とぼく。
おひさまのしたで、リスやウサギや鳥や花をみてあるいた。空気がすごくきれいで、きもちがいい。ぼくらはたちまち、子馬みたいにげんきになった。
緑のなかでたべるごはんって、なんでこんなにおいしいんだろう。

そうして、日がしずむまで、あそんだ。
「家族ですぐすと、たのしいわね」とおかあさん。
「ああ、きてよかったね」とおとうさん。
「あっ、チョウチョウがとんでるわ」おねえちゃんがわらった。
ぼくもわらいながら、大きな声でいった。
「煙がないってきもちいいね」
そのあと、ぼくらは、ほんものの子馬をみたんだ。元気いっぱいだった。
きっと子馬も、煙がなくなったのを、よろこんでいるんだろう。